◉京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告　第十一册

京都府史蹟勝地保存委員會の昭和三・四兩年度に亘る調査の成果を收め西田直二郎博士、佐藤虎雄學士の執筆にかゝる。內容は京都市に於いて知足院と保元亂遺蹟並に崇德天皇御廟所郡部に於いて笠置山の史蹟及び名勝以下十二箇所に及ぶ。通讀、前諸册に比して稍々顯著なるものに乏しい感がないではないが、就中保元亂後崇敬の篤かつた崇德院の靈社及び御影堂の、春日の末にあつたものは既に早く亡び、今纔に殘るもの祇園歌舞練場の東にあつて日夜弦歌の聲に覆はれ何人も顧るものなきに至らうとしてゐるのは、調査の當時新聞紙にも報導されて識者の注意を引いた所、また相樂郡法華寺野に於て發掘された牆壁に類する遺跡が伴出する瓦によつて奈良朝おそくも平安朝初期のものと斷ぜられ、その構造その位置等によつて或は甕原離宮趾若くは國分尼寺趾と推定されてゐるのは猶研究の餘地を殘すこはいへ、十分注意さるべきものであらう。（四六倍版本文一一二頁、圖版四二葉）〔以上柴田〕

◉英米佛聯合艦隊幕末海戰記　安藤德器・大井征共譯

佛國海軍士官 Alfred Russinの著"Une Campagne sur les côtes du Japon"の全譯である。全篇九章に分たれ其中五章が下關砲擊從軍記、他は彼等の眼に興味深く映じたらしい日本の社會組織や、當時の國情殊に幕府の對外方針と尊王攘夷の運動の關係に就いて觀察が要領よく記されてゐる。明治維新史の究明が悉ゆる方面より要求されてゐる時本書も亦其目的のために有效なる一使命を果し得るであらう。譯文流暢單なる讀物としても興味深く通讀される。尙附錄參考資料として英國公使アルコックの報告狀等二十點を載せて本文記事を補足し又其誤謬を訂正してゐる。（四六判　四一四頁、定價一、五〇　平凡社發行）〔藤〕

◉近代日支鮮關係の研究　田保橋　潔著

本書も亦前書と略同時に第三輯として發行され著者が

數年間筐底に藏した原稿に廣般な改訂を加へて公にされたものである。本篇は日支兩國の官公文書によつて明治十八年天津條約より明治二十七年日支開戰に至る迄の三國關係を考察するを主眼とする。特に注目すべき新說があるわけではないが朝鮮を中心とする外交上の重要期について和漢洋の史料を基礎として相當詳しい著述の出た事は注目に價する。（京城帝國大學發行、非賣品）

◉咸鏡南道及び黃海道の方言

小倉　進平著

本書は去る四月京城帝國大學法文學部研究調査册子第二輯として發行され爰に印行された「咸鏡南北道方言」及び「平安南北道の方言」と合せ見るべきものである。著者が前年度に引續き昭和四年兩道の殆んど全部に亙つて調査した結果の發表で兩道方言の特質を音韻、語法、語彙の三方面から觀察して其分布の狀態を明にしたのみならず中間に介在する此地方の方言が既に調査し得た江原道咸北平安南北道のそれに對して如何なる關係に立つかを論じ黃海道方言と咸鏡南道方言の間には著しい逕庭があり咸鏡南道方言は更に南部と北部に於て大なる相違があり南部は黃海道のそれに近く咸南特有の方言は咸北南部及び平安北道厚昌地方迄伸張して居ると結んで居る（京城帝國大學）。〔以上今石〕

◉西洋中世史の研究

文學博士　植村清之助著

坂口博士は、ランケ史學を深く體得して、吾が國の史學に古典的な重さを加へられたが、他面に於いて植村博士は、西歐の傳統的史學に對する一流の批判を以つて、日本に於ける西洋史研究の爲に獨自の生面をオリエンチーレンして居られた如く想はれる。本書は斯かる想定の謬らざる事を示して居る。

採錄せる七論篇の中、六篇は既に專門誌上に價値を問はれたものである故に、卷頭の一篇「中世初期に於ける國家的社會的變遷の研究」を紹介する。京都帝國大學に學位論文として提出せられた本篇はRomani及びBarbariの對立を中心として觀たる古代中世轉換期の歷史的考察